
村人Aはレベル1

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

村人Aはレベル1

【Nコード】

N1173K

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

「ちよつとモモミンを探してきてくれ」「ちよつとベホイミを教えに行ってくれ」などなど、ムダにハイスpekなじさま（レベル100）の無茶ぶりにほんろうされる村人A（レベル1）のものがたり。

とっじょっじんぶつ

登場人物

話の展開に伴って増えることがあります

*じさま

レベル：100

なまえ：ジョン・まんだろう

しよくぎょう：むらのおえらいさん

そのた：

ははジョゼフィーヌと、ちちマンタロウのあいだにうまれた。

ははとちちのなをもらい、ジョン・まんだろうとなづけられる。

よわい5さいにして、しよきゅうまほうをしゅうとく。

むらのしゅういのモンスターをせんめつし、ゆうしゃのしょうぐうをえる。

そのご、しゆぎょうをかさね、かずかずのでんせつをのこす。

たびさきでドラゴンのまつげから、みずむしにきくクスリをつくり、けんじやとしてなをとどろかせる。

*ばさま

レベル：49

なまえ：フレデリカ・おきく

しよくぎょう：むらのいきじびき

そのた：

わかいころは、おどりこととしてゆうめい。

*村人A

レベル：1

なまえ：ああああ

しよくぎょう：むらびとA

そのた：

げんざい、16さい。

モモミンと魔王と村人A 1（前書き）

*この物語はパロディです。

モモミンと魔王と村人A 1

ある昼下がりのことです。

村人Aは村のお偉いさんのじさまからこう言われました。

『ちよつとモモミンを取ってきてくれ』

首を傾げた村人Aに、じさまは微笑みました。

太陽の光がじさまの頭で反射して、村人Aの目をぐさり。

村人Aは思わずうつむきました。

それを肯定ととったのでしょうか。

じさまはスタスタと歩き去ってしまいました。

『じゃあよろしく』

よろしくと言われても・・・と村人Aは目をこすりながら思います。

モモミンって、何？

考えてみても分からなかったので、村の生き字引のばさまに会いに行きました。

しかし、ばさまは何も言わずに笑うのみでした。

無駄にハイスペックな、若い頃は賢者として名を広めたじさま（レベル100）の言ったことです。もしかしたらばさま（レベル49）にも分からないのかもしれませんが。

モモミンの情報を求めて三千里。

探し回った末に、村人Aはある町の路地裏の露店で『捜せ、モモミン』という巻物を見つけました。

一安心した彼は経過を報告しにじさまのもとに向かいます。

すると、じさまは

『数年前に読んだのう』

と言ったので、村人Aは自分の物知らずさに赤面しました。

『手引きもあることじゃし、よろしくたのんだぞ』

じさまに言われた村人Aは、とにかく『捜せ、モモミン』を読ん
でみました。

“七色山の麓、ルンルン滝の近くにモモミンはある”

なるほど、と村人Aは頷きました。

七色山なら何度か行ったことがあります。

ルンルン滝は知りませんが、きっと近くにあるのでしょう。

村人Aは一安心して一晩休みました。

村人Aは知らなかったのです。

七色山の麓には最近、魔王が住みついたのだということ。

モモミンと魔王と村人A 1（後書き）

つづく

モモミンと魔王と村人A 2（前書き）

これまでのお話。

「ちよつとモモミンをとってきてくれ」と村のじさまにたのまれた村人A。

紆余曲折の末にモモミンが七色山の麓、ルンルン滝のそばにあることを知った彼は、旅に出ようと心を決める。

・・・七色山の麓に、魔王が住み着いたことを知らないまま。

モモミンと魔王と村人A 2

翌朝、にわとりが鳴く前に目をさました村人Aは、トウモロコシの皮に黒パンをいくつかくるみ、井戸で水を汲み、草を払う木の枝を一本持つて旅立ちました。

そして、いつものように村近くの野原を横切ろうとした彼は、大地に大きな亀裂が入っていることに気づきました。

異変はそればかりではありません。

七色山に行く途中いつも水を汲んでいた沢は干上がっていました、美味しい木の実がなるはずの木には真っ黒に光る石がなっていました。果ては、いつもは温厚なスライムまで襲いかかってくる始末です。

村に戻ろうかなと村人Aは少し考え、そして首を横に振りしました。

いけません。

モモミンを楽しみにしているじさまをすっかりさせることになってしまいます。

おそいかかるモンスター（スライム）から逃げ、食べられる木の実しかもすいや水（まれに呪いがかかっていることがある）を探し、村人Aがなんとか野原を超え、七色山の麓にたどり着いたのは3ヶ月後のことでした。

「やっと、たどりついた・・・」

いつもなら徒歩半日だったのに、と泣きそうな声で呟いた村人Aは、あたりを見回して青ざめました。

みわたせど、みわたせど、木々が鬱蒼と生い茂るばかり。

ルンルン滝が見つかりません。

それどころか、あちこちに強そうなモンスターが行き来している

のが見えます。

首を傾げながら、村人Aは思いました。
帰ろうかな、と。

しかし、振り返った村人Aの目にうつったのは、霧に霞んで獣道一つ見えない野原でした。

・・・どうにも、帰れそうにありません。

村人Aは、気をとりなおしてモモミンを探しはじめました。

あの黒紫色のキノコだろうか、それともあの黒緑色のコケだろうか、もしかあの赤黄色の石ではなかるうが・・・。

ふ、と。

村人Aは気づきます。

モモミンが何なのか、知らない自分に。

こんな時こそ、手引きの出番です。

意気込んで手引きを開いた村人Aは、度肝を抜かれるような思いを味わうことになりました。

なにしろ、手引きは白紙になっていたのですから。

いったいどういうことなんだろう。

分からないまま、村人Aはさまよい、そして1ヶ月が経ちました。水や食べ物は何とか見つけられたものの、帰ろうにも帰り道は見つからず、手引きは白紙のまま。

どんよりと沈んだ気分そのままに辺りは真っ黒にかすんでいました。

けれど、そらには丸い月が青く浮かんでいます。

『満月、か』

村人Aは呟きます。

日に日に薄暗くなっていく辺りの景色にも、密集している強そう

なモンスターにも慣れてきましたが、やはり灯りがあるとほっとするものです。

その時でした。

村人Aの視界のはしっこで何かが白く揺れました。

ユメミバナが満月の夜にだけ作り出すという蜃気楼です。

『珍しい物をみたなあ』

しみじみとこぼした村人Aは、少しだけ目を細め、そして瞠目しました。

蜃気楼の中に白い看板があったからです。

看板には、こんな文字が書かれていました。

【ルンルン滝、ここから2ゼーク】

つづく

モモミンと魔王と村人A 3（前書き）

＊ここまでのお話。

「ちよつとモモミンをとってきてくれ」と村のじさまに頼まれた村人Aは、七色山の麓、ルンルン滝のそばにあるというモモミンを探して四ヶ月におよぶ旅の果てにユメミバナが作り出す蜃気楼を見つけた。

しばしの安息をえていた村人Aは、ある事実に気づく。
蜃気楼の中に『ルンルン滝、ここから2ゼーク』と書かれた看板が立っていることに。

モモミンと魔王と村人A 3

ルンルン滝。

それは、モモミンがそばにあると手引きに書かれていた場所の名前でした。

思わず、村人Aは看板に駆けよります。

目の前にユメミバナがせまります。その背後には大きな木。

このままではぶつかってしまうことが分かった村人Aは、止めようとした足をもつれさせ、もんどりうって地面に転がりました。

「・・・あいたたた」

したたかにぶつけたひざこぞうをさすりながら、村人Aはつぶやきながら辺りを見回し、目をみはりました。

そこは、青い水底のようでも緑の草原のようでも赤い荒野のようでもありながら、そのどこでもない白い場所でした。あたりは寸分も同じ景色ではなく、常にその輪郭をうつろわせています。

どうしてだか分かりませんが、村人Aは蜃気楼の中に立っていたのでした。

目がチカチカするような景色の中で、彼はとにかく看板を見つめます。

辺りの景色がどれほど変わっても、看板は同じ形を保っています。と、看板の後ろに新たな看板が見えました。

【ルンルン滝、ここから1・999ゼーク】

その看板の後ろには、また新たな看板が。いつたいどんな几帳面な人が立てたのか、といったおもむきで続

『あれが、モモミン？』

口に出してから、村人Aはあわてて手引きを取り出しました。少し熱を帯びた巻物が、蜃気楼の中にひとりでにひろがり、そして今まで見たことのないような文字が浮かび上がりました。

もちろん、村人Aには読めません。

突然浮かび上がった文字に驚く気すらなくなった村人Aは、げんわりとその文字を見つめ。

目の前の透明な雫こそが、モモミンだろうと結論づけました。これで、じさまのミッションは達成です。

よかった、と村人Aはため息をつき、そして手を伸ばしました。

その時です。

薄い水色の、とさかがあるスライムが突然あらわれて村人Aの手をはねのけたのは。

モモミンと魔王と村人A 3 (後書き)

つづく

モモミンと魔王と村人A 4（前書き）

＊ここまでのお話。

「ちよつとモモミンをとってきてくれ」と村のじさまに頼まれた村人Aは、七色山の麓、ルンルン滝のそばにあるというモモミンを探して四ヶ月におよぶ旅の果てにユメミバナが作り出す蜃気楼を見つけ、ひよんなことからその中に飛び込む。

なんとかたどりついたルンルン滝でモモミンを見つけ、手を伸ばした彼は、しかしスライムに阻まれてしまうのだった

モモミンと魔王と村人A 4

『……』

茫然と、村人Aは辺りをみつめます。

辺りの景色がどれほど変わっても、ルンルン滝はそこにありました。

モモミンも、少し離れたところにあります。

そして・・・信じたくないことに、スライムも目の前にいました。村のそばの野原でたむろっているような、ありふれた形のスライムに見えます。たまに村の悪ガキが飛び乗って、ぶよぶよと飛び跳ねたりどぼんとつぶされたりするような、スライムに見えます。とさかさえなければ。

ぎろり、とさかのあるスライムの紅い目が揺らめきました。思わず視線を合わせた村人Aは、しまったとほぞをかみます。

・・・モンスターとは視線を合わせないのが鉄則です。

万が一視線を合わせたら・・・いつ戦闘になってもおかしくありません。

そして村人Aの特技は、モンスターと視線を合わせないことでした。

山にたきぎを取りに行っても、野原で遊んでいてもモンスター（主にスライム）と出会う世界です。戦闘にならないならそれに超したことはありません。

村人Aは自分が弱いことをよく知っていましたし、痛いのはとても苦手でした。だからこそ、彼はモンスターと目を合わせないことを心がけ、モンスターとの戦闘をほとんど経験せず、結果的にレベル1のまま成人の年を迎えてしまったのでした。近所の悪ガキでさえ、レベル6はあるというのに！

モモミンを探しに旅に出てからも、村人Aは毎日のようにモンスターに襲われてきました。火をはくものもいましたし、毒をもつものもいました。そのすべてから命からがら逃げ延びてきたというのに、こんなところでスライムと対峙する羽目になるなんて！！

なんとか話し合いで解決できないものか、と村人Aは口を開こうとし、そして猛スピードで突撃してくるスライムに、慌てて後ずさりしました。

とさかがキラんと光ります。悪い予感がして飛び退いた村人Aは、次の瞬間あんぐりと口を開けました。スライムのとさかが、地面を切り裂いていたのです。

村人Aの顔が青ざめました。

スライムって、こんなことができたっけ、と首を傾げているヒマさえありません。

スライムのとさかがまた光り、こんどは村人Aの顔面に飛び込んできたからです。

「つく」

なんとか木の枝で攻撃を受けとめた村人A（レベル1）はまだ気づいていません。

そのスライムこそが、魔王（レベル99）だということなどは、気づかないまま、村人Aは奮闘します。

正確には、スライムに力負けして尻餅をつき、結果的にスライムの攻撃をなんとかかわしました。

その手に握りしめられているのは木の枝。

ちなみに、攻撃力はたんこぶ1コ分です。

草を払うくらいにしか使えない木の枝は、これまで逃げ回ってきたなかでずいぶんとぼろぼろになってしまっています。一撃でも保ったことが奇跡のようなものです。

案の定、木の枝はぽつきり折れ、村人Aは徒手空拳になってしま

ったのでした。

「げ」

とまどっているヒマすらありません。

次の一撃が来ます。

おしつぶされかけた村人Aは、逃げる手段を真剣に模索しはじめました。

レベル1の彼に、スライム（魔王：レベル99）の実力を見抜く力などもちろんありません。

が。分かってしまったのです。

逃げなければ、命がない、ということとは。

モモミンと魔王と村人A 4（後書き）

つづく

モモミンと魔王と村人A 5（前書き）

*これまでのお話

「ちよつとモモミンをさがしてきてくれ」とムダにハイスペックなじさまから頼まれた村人Aは艱難辛苦の末にモモミンを見つけ、手を伸ばす。

が、その手はとさかのあるスライムにはねのけられてしまった。

村人A（レベル1）はまだ知らない………そのスライムこそが魔王（レベル99）であるということ。

モモミンと魔王と村人A 5

じり、じり、と村人Aは力二のように歩を進めました。

当然、スライム（魔王）もついてきます。

じり、じり、じり、じり。

もどかしくなるような歩みの中で、村人Aは少しずつモモミンに近づいていました。

めまぐるしく移り変わる景色は今や、断崖絶壁に切りかわり、モモミンが生えているのはまさに崖っぷちです。

改めて述べることはありませんが、村人Aも崖っぷちです。
なにしろ、スライムが突撃の体勢に入ってしまったので。

スライムのとさかがきらん、と光ります。

けれど、その動作はさきほどの、かわせたのが奇跡のような速さからはほど遠いほどゆったりとしています。さすがに村人Aも気づきました……遊ばれているのだということに。

形が似ているのですから当然ですが、目の前のスライムばなれしたスライムの動きは、子どもの頃に野原で遊んだスライムたちとよく似ています。4歳の子どもを押しつぶして転がそうとしているような、そんな気配さえ感じます。村の全ての子どもがそうであったように、村人Aにもそんな体験があります。

ふ、と村人Aは気づきました。

もしこのスライムが、かつて遊んだスライムと同じであるのならば……。

起死回生の一手を思いついた彼の目に、生気がよみがえります。

その目の前で、きらん、ととさかが光ります。

じり、じりとせまりくるスライムの動きが、少し素早くなりしました。

攻撃が来る。

そう気づいた村人Aは、飛び退くのではなく、スライムに向かって駆け出しました。

パン

乾いた音が響きます。

辺りの空気が、凍ったかのように止まりました。

村人Aはスライムの鼻先で打ち合わせた手を握り、その横をすりぬけて駆け出しました。

スライムは、まるで鈍化魔法をかけられたかのように止まっています。

最終奥義。ネコ騙し。

レベル1の村人Aは、生活用の魔法はともかく戦闘魔法はろくに使えません。

戦闘中に使えそうな魔法といえばメガヒールくらい。この局面で役立つわけがありませんし、ぶっちゃけMPのない村人Aにとっては、使いどころのないムダ知識、とりびあです。なにしろ、1度使うと10日間寝込むという、明らかに死亡フラグなのですから。

ですが。

毎日畑をたがやしてきたとはいえ筋肉がそうついているわけでもなく、モンスターから逃げ続けて16年間レベル1を維持し続けてきてしまった彼にも、逃げるために培ってきた技が一つだけありました。

それが、このネコ騙しです。

目の前で派手な音がすれば、誰だって目を閉じてしまうものです。ましてや目が大きいスライムのことですから、目を閉じない方がおかしいでしょう。

案の定、スライムは凍り付いています。攻撃を受けたのにダメー

ジがないことをいぶかしんでいるのでしょう。紅い目にクエスチヨ
ンマークがにじんでいます。

全速力でモモミンにむかって後ずさりした村人Aは、透明なそれ
を力任せに一枚ひきちぎり、そして全力で駆け出しました。
後ろに向かって。

モモミンと魔王と村人A 5 (後書き)

つづく

モモミンと魔王と村人A 6（前書き）

*これまでのお話

「ちよつとモモミンをさがしてきてくれ」とムダにハイスペックなじさまから頼まれた村人A（レベル1）。すったもんだの末に魔王（レベル99）と対決することになってしまった彼は、最終奥義「ネコ騙し」を駆使して逃亡する。

果たして無事に村に帰ることができるのか、は誰も知らない。

モモミンと魔王と村人A 6

思った通り、スライムの姿がぐんぐん遠ざかります。

体勢を立て直したスライムが追いかけてくる気配がありますが、村人Aの速さにはついてこれていないようです。

そりゃあそうです。

スライムは前に向かって全速力で進もうとしているのですから、後ろ向きに全速力で進んでいる村人Aに追いつけるはずがありません。

崖っぷちだった景色は今や、どこまでも広がる大平原です。

木の棒で払う必要すらない丈の低い草原を、看板を頼りに村人Aは走りました。

走って走って走って、足がぐくぐくして喉がぜいぜい言ってもなお走り続けて、耐えきれなくなった足がもつれて地面に転げるまで数秒。

「……………あ、はあ、はあ……………」

荒い息をなんとか整えようとしていた村人Aは、見るともなく眺めていた世界が全く変化しないことに気づいて目を見開きました。

何度まばたきをしても、景色は変わりません。

どこまでも鬱蒼と、木が生い茂っているばかりです。

「……………で、れた？」

呟いた瞬間、その事実が確信に変わりました。

「でれた……………でれた！」

やはり黒々とかすんだ空には、丸い月が浮かんでいます。

なんとなく持ち上げた右手には、透明なモモミンの欠片がひとつ。
村人Aは喜びのあまり地面を転げ回り……しばらくしてから我に返って青ざめました。

「スライム！」

飛び上がらんばかりの気分で辺りをうかがって見たものの、モンスター
の気配はありません。

長いため息をついて、村人Aは立ち上がろうと体を起こしかけ、
パタンと倒れました。

限界でした。指先すら動きません。

村人Aはそのまま、深い眠りに落ちたのでした。

モモミンと魔王と村人A 6 (後書き)

つづく

モモミンと魔王と村人A 7（前書き）

*これまでのお話

「ちよつとモモミンをさがしてきてくれ」とムダにハイスペックなじさまから頼まれた村人A（レベル1）。すったもんだの末に魔王（レベル99）と対決することになってしまった彼は、最終奥義「ネコ騙し」を駆使して逃亡したものの、疲労のあまり寝入ってしまった。

果たして彼は無事に村に帰ることができるのか、は誰も知らない。

モモミンと魔王と村人A 7

ふ、と開いた目の前に、ぼんやりとにじんだ明るい緑色が待っていました。

あたりにただよう爽やかな香りに、村人Aの意識が少しずつはつきりしてきます。

瞬きをすれば、緑の輪郭が鮮明さをましました。

地面を覆うように広がる、やわらかな緑。

風に揺れる細い茎。

それから、薄い水色のつぼみ。

「リョクオウ？」

この季節に？ と内心で首をひねりながら村人Aは体を起こし…
…絶句しました。

春がやってくる少し前、夜明け前の水がめに薄氷がはっているような時期に、ほんの一輪か二輪だけ咲くはずの花が、見渡すかぎり一面に広がっていたからです。

「……………」

驚きのあまり声も出せない村人Aのほほを、風がくすぐるようになでてゆきます。

その風にのって、リョクオウの花がいつせいに舞い上がりました。ゆるやかに、花が空へと散ってゆくのを、村人Aはあっけにとられて見つめました。

どこまでも

いつか聞いたことのある光景です。

何十年も前に一度だけ、村のじさまが見たという……。
はっと息をのんで見やった右手には、透明な欠片が一つ。

「・・・夢じゃ、ないのか」

ぼんやりと呟いて、村人Aは視線を戻しました。

視線の先ではリョクオウが、空にとけるように花びらをおどらせて、高く高く飛んでいきます。

今まで意識もしなかった陽ざしが、大地をとかすように降りそそいでいます。

はるかかなたに、七色の滝が見えた気がして、彼は目を細め、そっと笑いました。

一応は、やりとげたことになるのかもしれない。

それは少しばかり誇ってもいいことのように感じられたので。

「・・・きれい、だよなあ」

呟いた言葉すら、風がそっと拾っていきました。

あとには、さっきまでの光景が幻であったかのような、緑の草原が残りました。

さやさやと、さやさやと、リョクオウの葉を風が渡っていきます。その響きに誘われるように、村人Aは再び目を閉じました。

モモミンと魔王と村人A 7 (後書き)

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1173k/>

村人Aはレベル1

2010年10月8日14時53分発行